

貧困と学力に関する研究

—体験格差から考える—

村川稜七

本研究を行った契機は、学力の習得には格差があるとインターネットの記事を見たことである。考える力の源である学力の獲得に格差があるということを知ったときに、衝撃を受けると共に、強い問題意識を感じたことを今でも覚えている。格差が生じるのは経済面であるということを知ったため、貧困と学力の関係性についての研究を始めた。

本論文では、SES 別に見た学力の習得具合や、どのような子どもが高い学力を習得するかなど、学力の習得に関することだけではなく、格差の解決策やペアレントクラシーの社会についてや、体験格差についてなど、いろいろな視点から述べた。

これまでは、子どもが学力を習得する際には、親の影響を強く受けてきた。例えば、世帯収入、例えば父親の学歴・母親の学歴などである。いわばペアレントクラシーと呼ばれる社会の中で、子どもたちは自らの学力を高めてきたのである。

しかし、児童扶養手当などの政府・自治体による支援策や、Chance For Children が出している「子どもの『体験格差』の実態」などの調査により、格差を縮小しようとする取り組みやこれまで実施されてこなかった実態調査により、少しずつ学力格差が明るみになり、対策が成されようとしてきている。これは良い傾向だ。しんどい層を経済的・文化的・社会的に支えることや、親の影響力を相対化するなどの対策など、ペアレントクラシーを廃絶することはできなくとも、それを縮小する取り組みが重要だと結論付けた。

最後に、考える力の代表例である学力の獲得を親が子どもに望むのは当然のこととして、そこで親の影響力を如何に少なくして、子どもの将来を守れるか、これからの政府・自治体の対策に期待する。